



.....  
 監督・製作＝アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトウ／脚本＝キジェルモ・アリアガ／編集＝スティーヴン・ミリオン／出演＝ショーン・ベン／ナオミ・ワッツ／ベニチオ・デル・トロ（ギャガ・ヒューマックス共同配給／2003年アメリカ映画／124分）  
 .....

「心臓移植」をテーマに描かれる、3人の名優たちによる3組の男女の人間模様。バラバラに分解された時間軸の中で、いくつかの物語が展開され、それが次第に1本に集約されていく。その理解は多少困難で、観ていて疲れる面もあるが、その分、迫力と深みがあり、見ごたえ十分。それにしても『21グラム』とは、何とも象徴的なタイトル……。

### 🎬 3人それぞれの人生

この映画には、3人の主人公が登場する。第1は、ポール（ショーン・ベン）。彼は大学で数学を教えていたが、余命1カ月と宣言され、心臓移植の順番を待っている身。その妻マリー（シャルロット・ゲンズブール）は、そんな彼の子供が欲しいと、人工受精を望んだが……。

第2は、過去のドラッグ依存を断ち切り、今は優しい夫マイケルと二人の娘に囲まれて、幸せな生活を送っているクリスティーナ（ナオミ・ワッツ）。そんな彼女を、一挙に奈落の底に突き落としたのは、夫と子供2人の交通事故。絶望状態に陥った彼女は、再びドラッグに……。

第3は、いくつかの前科をもちながら、今はイエスを信じることによって、懸命に生きていこうとしているジャック（ベニチオ・デル・トロ）。入れ墨をもつ彼は、ゴルフ場のキャディの仕事についていたが、突然、解雇宣告。妻リアンヌ（メリッサ・レオ）と2人の幼い子供を養っていくことは厳しいものの、クジ

で当たったトラックは神様からの授かり物だと信じて、懸命に働いていた。

そんな、何の関係もない3人の主人公それぞれの人生だったが……。

### 3人を結びつけたのは交通事故

突然かかってきたクリスティーナへの1本の電話は、交通事故によって、夫と2人の子供が重傷を負ったというもの。急いで病院に駆けつけたものの、医師からは何とも冷酷で、悲しい報告が……。この交通事故を起こしたのがジャック。ジャックは、「神様にはウソはつけない」と、妻の制止を振り切って自首したが、神様からの贈り物だったはずのトラックで、交通事故を起こしたことによって、ジャックの信仰心は失われ、「神様に裏切られた！」と叫ぶ始末。以降、完全にジャックの生きる指針や生きる希望は失われてしまった。

他方、この交通事故によって恩恵を受けた(?)のは、ポール。事故直後、心臓移植の可否の判断を迫る医師に対して、クリスティーナがこれを許可したため、ポールはクリスティーナの夫マイケルの心臓の移植により、死の淵から蘇ることができたのだった。

### 3人を結びつけたのは、ポールのドナー探しから……

人工受精でも、心臓移植でも、その「ドナー探し」は厳禁とされているが、映画や小説のネタとしてはよく登場する。そりゃ誰だって、それが「誰のモノか？」について、興味をもつのは当然。ただし、この映画におけるポールのように、探偵社に頼んで調査するとなると、それは当然問題あり……？

それはさておき、この「調査」によって、ポールは心臓提供者がクリスティーナの夫マイケルであることをつきとめ、以降彼女への「接触」を図っていく。接触の「動機」を、映画は明確に描いていないが、ポールとその妻マリーとの人工受精をめぐる議論の中で明らかとなった、妻の過去の人工妊娠中絶の事実や、2人の中の終焉という状況が、その大きな動機であるのは明らか。

そして、妻との不仲が続く中、ドナー探しの中で見つかったクリスティーナとの間に、あってはならないはずの男女の感情が、次第にポールの心の中に芽生えてきた。そして当初は、ポールからの接触を避けていたクリスティーナも、「君

のことが好きだ！」と言ったポールの真意をはかりかねながらも、なぜか熱い想いに……。この2人の男女がめぐり合い、言葉を交わし、そしてポールがクリスティーナを食事に誘い、ベッドに入るまでの微妙な心の動きは、ショーン・ペンとナオミ・ワッツの名演技によって、見事に表現されている。

さらに圧巻は、ポールが夫マイケルの心臓移植を受けた男だとわかった時の、クリスティーナの怒り。しかし、家の前に停めた車の中で一夜を明かしたポールをみて、クリスティーナは再び率直に、その愛を受け入れることに……。

### 他方ジャックは……？

神様に裏切られ、生きる希望を失ったジャックは、弁護士も不要だと言ううえ、家族のもとを離れ、今は1人ぼっちの生活の中で自己の罪と直面していた。ポールはそんなジャックの姿も把握していたが、再びドラッグにおぼれたクリスティーナの、「ジャックを殺して！」という言葉をどのように解釈すべきか、思い悩んでいた。今は既に、妻マリーとも離別したうえ、せっかく移植を受けた心臓にも不具合があり、再度入院して、次の心臓移植を受けなければ、心臓発作で苦しんで死ぬことになる、医師から告げられたポールは、自分の最後の役目をジャックへの復讐と決めたが……？

他方、クリスティーナやポールの事情は全く知らないまま、一人ひっそりと生活をしながら、自分の罪を見つめ続けているジャックは、なぜ自分が突然見ず知らずのポールに襲われたのかもわからないまま……？

心臓移植を通じて結びついたポールとクリスティーナは、ジャックへの復讐心から、ジャックと接触していったが、果たしてその結末は……？

### この映画の製作・監督と編集は……？

この映画の監督と製作はメキシコ人のアレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ。パンフレットによれば、「2000年、カンヌ国際映画祭批評家週間に出品された長編映画初監督作『アモーレス・ペロス』がいきなりグランプリに輝き、翌年のアカデミー賞外国語映画賞にノミネート、世界はメキシコからやって来た驚異の才能に騒然となった」と書かれているが、残念ながら私は全然知らなかった。

他方、この映画を編集したのは、2001年度アカデミー賞で監督賞・脚色賞・助演男優賞・作品賞の4冠を獲得した『トラフィック』(00年)で、編集を担当したスティーヴン・ミリオン。このスティーヴン・ミリオンの編集は時間軸をバラバラにしたうえ、個々の出来事をこま切れにして、これを断片的に編集・構成し、次第にそれを1本にまとめていくというもの。したがって、3人の主人公がもつそれぞれの出来事が、時間軸と関係なく監督と編集責任者の思惑に沿って、スクリーン上に断片的に示されていく前半は、ストーリーの理解はかなり難しい。事前にパンフレットを読んでいなければ、かなり困難だろう。

実は私は、2000年に『トラフィック』を観た時、お酒を飲んでいただけでもあって、途中、ポーッと観ていた部分があり、ストーリーがサッパリわからず、イヤになったことがあった。そんな体験を踏まえ、この映画では、事前にパンフレットを読み、真剣勝負(?)でスクリーンに目をこらしていたので、その面白さを十分理解することができたというものだが……?

## ナオミ・ワッツの熱演は立派

この映画の「売り」は、主人公3人がそろって2004年度のアカデミー賞の主要部門にノミネートされたこと。すなわち、ショーン・ペンは『ミスティック・リバー』(03年)でアカデミー賞最優秀主演男優賞に輝き、ナオミ・ワッツは『21グラム』(03年)でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、ベニチオ・デル・トロは『21グラム』(03年)でアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた。

ショーン・ペンとベニチオ・デル・トロのベテラン男優の演技力は極めつけのものだから、すばらしくて当然(?)。しかし、私が驚いたのはナオミ・ワッツの熱演。彼女は、最近の作品『ル・ディヴォース〜パリに恋して〜』(03年)では、ケイト・ハドソンとともに姉妹として登場し、明るくて楽しい役柄を演じていた。しかし、それとは一転してこの映画では、一瞬にして夫と子供2人を奪われた絶望状態の中、夫の心臓移植を受けたポールと出会い、さまざまな気持の葛藤と錯綜の中で生きていく女性の姿を見事に演じている。その演技力も、2人の男優に負けないほど堂々としたものなら、そのヌードシーンの大胆さも立派。この映画は、きっと彼女の代表作となるだろう。 2004(平成16)年6月21日記